

【単年度事業評価様式】

**港北区地域子育て支援拠点事業
令和6年度重点目標評価結果・令和7年度重点目標**

事業実施期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日（5年度目／5か年度）
事業の実施者	認定NPO法人びーのびーの 港北区こども家庭支援課
事業目的	市民が安心して子どもを生み育て、子育てに喜びを感じることができる社会環境を形成し、子育てを地域全体で支援する地域力の創出に寄与することを目的とします。 【事業・施設運営の基本理念】 1 港北区における、地域による子育て支援の拠点施設としての運営 2 子どもの視点に立ち、すべての就学前児童及びその養育者、並びに子育てに関する支援活動を行う者に開かれた運営 3 子どもと家庭を支援する各種の行政等機関・地域等との連携を図る運営 4 利用者の意見、子育てをめぐる社会情勢、市民ニーズの変化に柔軟に対応できる運営 5 子ども及びその養育者の育ちを支援するとともに、養育者自身が事業の担い手として関わるることができる視点に立った運営 6 地域の人と人とのつながりを広げ、地域ぐるみの子育て支援を目指す運営
事業の内容	1 乳幼児の遊びと育ちの場及びその養育者の交流の場の提供（親子の居場所事業） 2 子育てに関する相談及び関係機関との連携に関すること（子育て相談事業） 3 子育てに関する情報の収集及び提供に関すること（情報収集・提供事業） 4 子育てに関する支援活動を行う者同士の連携に関すること（支援者ネットワーク事業） 5 子育てに関する支援活動を行う者の育成、支援に関すること（人材育成、活動支援事業） 6 地域の住民同士で子どもを預け、預かる支え合いの促進に関すること（横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業） 7 子育て家庭のニーズに応じた施設・事業等の利用の支援に関すること（利用者支援事業）
事業の評価実施方法及び評価結果の公表方法	1 今年度の取組状況や利用者アンケート結果等をもとに、協働契約書中の役割分担表の項目に沿って設定した、今年度の達成目標のうち、当該年度に特に重点的に取り組む達成目標である「重点目標」について、以下の通り、相互振り返りを踏まえた取組成果と課題を公表します。 2 今年度の取組状況や成果、課題を踏まえ、次年度の重点目標を公表します。

令和6年度重点目標の評価

令和6年度 重点目標①	こどもの視点を尊重した育ちを保障していくための風土づくり
取組内容	●こども家庭庁が提唱している「はじめの100か月の育ちビジョン」において、「安心と挑戦の循環」を通してこどものウェルビーイングを高めていけるよう、乳幼児期から安心して人との出会いや物にふれる機会を創っていくとともに、こどもの想いや願いを感じ取り、体験を積み重ねていけるよう、親や親以外の人ともその過程を共有していく。 ●日常のひろばでこどもが安心して感情を表出し話せる環境を創っていくとともに、こどもの声や意向に寄り添い、こども自身が尊重され大事にされる経験をすることで、自分に自信を持ち自己肯定感を育める居場所づくりを目指していく。 ●遊びを通して、こどもの持つ面白さや想像力などを最大限に惹きだしていくとともに、その可能性が成長発達に繋がる大切な過程であることを親や親以外の人とも共有し、日常の中でこどもの育ちを喜び合える時間を創出していく。 ●ひろばの環境設定や遊びのプログラム企画、多様な年齢がダイナミックに遊べる工夫に加え、外遊び、お散歩などの企画を一時預かり事業や地域の活動団体とも連携実施し、こどもが主体的に遊びこめる居場所としての機能充実に図る。 ●一時預かり事業等を通して、保育者から客観的な視点でフィードバックすることで、親がこども自身の持つ力や今できていること等に気づき子育てに対する肯定意識を高めていくとともに、こどもの日常の過ごしを担保しつつ、親以外の人とも安心して愛着や信頼関係を育んでいける接点を多く創っていく。
取組の成果	●こども自身の意思をまだ言葉で表現できない0～1歳の利用が約8割にのぼることで、職員はこどもと接する際に表情や感情表現、親の話などを元に、今、こどもがどう過ごしたいのかを想像力を高めるように努めた。こどもの意向を感じ取り、必要に応じて親や周囲に対して代弁するとともにこどもが心地よく過ごせる場となるよう、試行錯誤を繰り返しながらも、対話を深めていくことでこどもや親との信頼関係や愛着を育むことができた。 ●こどもに親以外の大人や学生など多様な人が関わり、遊びに一緒に向き合い呼応することで、自分の好きな遊びに集中できたり、新たな発想から生まれる遊びを創り出すこどもの姿を見ることができ、こどもの持つ面白さや発想の豊かさを感じ、親や親以外の人とも成長を喜び合える機会として共有することができた。 ●こどもの遊びを大事にしたいという思いから、ふれあい遊びや手遊び、体操などをする時間を日常的に設け、こどもが好きな遊びを紹介し合ったり、就園後や年齢の高いこどもたちに向けても身体を使った動きを取り入れるなど、ダイナミックに遊べるプログラムを開催した。地域の公園遊びや保育園、幼稚園の園庭開放など地域の社会資源とも連携することで、開放的な空間の中で集団で遊び込める外遊びの良さや楽しさを体感する機会を多く創った。 ●一時預かり事業では、こどもは通いなれた場所で日常の過ごしが保障されるとともに、親は自分に戻れる時間を持つことや保育者から保育中の子どもの様子を聞くことで、子ども自身の持つチカラや新たな一面を発見することができ、親自身の養育力の回復とともに子育てを肯定的に捉えられる機会を創り出すことができた。 ○親子を出張ひろばにつなぎ、地域の社会資源情報を伝え、安心して外出できるように支援をした。 ○健診や訪問時にひろば、出張ひろばの周知を行い、初めて拠点に向かう親子に同行してひろばにつながるよう支援した。
取組の課題	●多様な年齢層に対する遊びの提供をしていくための環境設定と仕組みづくりが必要。 ●こどもの人権を尊重し、こども自身の過ごしについての意向や感情を感じ取り、親や親以外の人とも共有する機会を増やしていきたい。 ●一時預かり事業は交流スペースで実施しているため、こどもが遊び込めるような専用室やこども同士での育ち合える環境づくりが必要。 ○窓口や乳幼児健診等で把握した相談傾向やニーズについては拠点定例会や利用者支援定例会の場で積極的に共有していく。 ○養育者にとって相談しやすい場を検討していく。

令和6年度 重点目標②	親になる前の体験の仕組みづくりと安心して産み育てられる環境の醸成
取組内容	●乳幼児とのふれあい体験授業を通して、学生が乳幼児家庭とふれあうことで、親になるイメージや子育てへの肯定意識を育む過程の大切さや、乳幼児親子にとっても自分の子育て経験が役に立つ有用感など、その相乗効果を学校や支援関係者とも共有し、次世代へのポピュレーションアプローチとして普及啓発に取り組む。 ●これから産み育てる層の学生に向けても、ボランティア活動や子育てサポートシステムの担い手となる研修(eラーニングを活用)等を通して、子育て家庭の現状理解とともに、ひろば預かり等を試行実施するなど関わりを深められる機会を創出していく。 ●区内全体として第一子を優先とする事業等が多いため、第二子以降の家庭や父親などに向けても、参画できる事業や取組を強化していく。 ●5か年継続実施している、4か月児健診受診者対象の調査の分析結果を産前産後支援に関わる専門職、関係機関、支援関係者と共有するとともに、妊娠期から安心して産み育てられる環境や仕組みを検討し具体的に展開していく。 ●子育て家庭が周囲の手を借りられるような環境づくりや、その人自身が自分らしくいられる家族のあり方を選択・応援できるような風土づくりに取り組む(里親制度の仕組みや現状理解等を含む)。
取組の成果	●触れ合い体験授業は今年度も市立小学校、中学校、高校で継続実施するとともに、事業の相乗効果を学校等にも伝え拡充することができた。学生の体験格差を平準化していくために働きかけを行った中学校技術家庭合同会議の場や県次世代育成課とも授業の成果・効果を共有できたことで、教育機関や支援関係者との事業理解が進んだ。 ●若い世代がボラリーグ活動や子サポ提供会員の研修受講を通して(eラーニング受講でのメリットを活かして)、子育て家庭の現状を伝える機会の働きかけや丁寧なフォロー体制を整えたことで、こどもと関わることの楽しさに加え、子育て支援の意義や価値を発信できたことで、関わる人材を増やすことができた。 ●ひろばでの利用者の声から「第二子以降の会」を実施したことで、同じ思いを共有したりお互いの生活における工夫点などを伝え合うことで、不安の軽減にも繋がり場への参画意識が高まった。また、妊娠期プログラムを土曜日にも開催することで父親からの相談の増加とともに、父親の声をもとに平日に父の会を実施したことで、育休中の父親が日常の過ごし方等について話を深めることができた。 ●「4か月児健診アンケート」での調査結果を踏まえて、母子保健コーディネーターや区保健師と協議しながら、母子手帳交付時に手渡す広報ツールを更新したことで、妊娠期家庭に向けた情報提供の機会を厚くすることができた。また、調査結果を「ぎゅっと」(親と子のつどいのひろばネットワーク会議)や主任児童委員連絡会等で報告するなど、子育て家庭の現状を伝え一緒に考える場を創ることができた。 ●利用者から、多様な子育て家庭の背景を知る機会を持ってほしいとの声があったため、養育懇談会や特別養子縁組家族の座談会等、市域の状況や制度について学ぶ機会を持つことで、当事者家庭の想いや現状課題を知ることができた。 ○ふれあい体験授業では必要に応じて区の保健師、助産師も打合せから関わりながら実施した。また、赤ちゃん会等で協力してくれる家庭の募集を積極的に行った。学生にとっても子育て家庭にとっても良い機会となっており、引き続き実施できると良い。 ○4か月児健診アンケートの結果をぎゅっとで報告し、支援関係者と子どもや養育者の動向について共有を図った。 ○母子保健事業や個別支援の中で、拠点事業の周知(ひととき預かり、ダブルケアカフェ、出産準備プログラム等)を行った。 ○親子で遊びに行ける場としてだけではなく、遊びながら相談できる場としても拠点を紹介し気軽に相談できる場となるよう周知した。
取組の課題	●乳幼児とのふれあい体験授業の取組についての現状把握と仕組みづくり。 ●子サポ事業を含む拠点の認知度は低いと感じているため、区内の大学や専門学校での広報の機会を得るとともに、20代の若手人材が活躍できる場を創っていきたい。 ●子サポ事業のeラーニング受講の推進と共に、学生や共働き世帯、退職した世代の方等に向けた提供会員の活動内容の可視化と周知。 ●家族間の相談が増えていることもあり、父親の育休取得率が上がっている状況をふまえて育休中の家族の過ごし家族が抱える現状把握。 ○「4か月児健診アンケート」、「どろっぶ利用者アンケート」などの調査結果を、支援関係者と共有すると共に、拠点での子育て支援の取り組みを様々な機会を捉えて発信する。

令和6年度 重点目標③	地域団体の活動応援と街づくりを目指した地域人材の参画の場づくり
取組内容	●地域資源の現状を把握し、地域の子育てサークルや活動団体が継続的に活動できるよう、支援関係者と団体の意向や地域の声、他地区での成功事例等を共有するとともに、共通認識を持ったうえで担い手を支えていく。 ●子育て支援に関わりの薄い層や企業等にも働きかけていくとともに、新たな担い手の発掘に加え、担い手として活動の裾野を拡げていけるような取組内容を障がい分野や高齢分野等の関係機関とも連携し、横断的な仕組みを検討していく。 ●地域や学校等との連携事業や子育て応援隊缶バッジの普及啓発活動等を通して、若い世代が担い手として参画できる仕組みづくりを行っていく。 ●子育て当事者が自分たちの生活課題から意見出しができたり、自分の生活をより豊かにするために語れる場や活躍できる場の創出など、街づくりを視野に入れて官民が一体となって取り組める機会を創っていく。
取組の成果	●公園遊びやプレイパークの参加者が減少していることから、代表者とも相談したうえで活動の様子を掲示したり、拠点内や公園で協働開催することで利用者が積極的に参加できる機会を多く創った。また、団体の現状課題を利用者に伝えるとともに直接つないでいくことで、地域の当事者グループが活性化し活動の継続にも繋がった。 ●「ななつから…」(地域訓練会や親子サークル)のメンバーが主体となり、オンラインでの就学セミナーの実施や地域の子育て家庭との相互交流の場を継続実施できたことで、参加者に向けては学校での生活イメージやこどもの関わりについて、具体的な経験談を還元することができた。また、学校や地域ケアプラザ、障害者施設等とも連携し、仲間同士や地域との繋がりを伝えられたことで団体としての価値を発信する機会ともなった。 ●ひとり親家庭への支援を推進していくためのネットワーク会議を行い、関係機関、地域関係者等との情報共有の機会を持つことで、親子の現状理解と共に夕食を囲む会(自主事業)での地区社協からの協力が得られた。拠点から離れた地域での食支援のネットワークにも参加したり、地域に広く働きかけたことで物資の運搬への協力体制も得られた。 ●港北区老人クラブ連合会とも連携し、婦人部が中心に作成した手作りおもちゃをひろば利用者のお土産として活用したり、「子育て応援隊」缶バッジの普及啓発活動を促進できたことで、親子の現状を伝えられる機会ともなり、事業理解が深まった。 ●第3期横浜子ども・子育て支援事業計画(素案)に対し、利用者と職員とで素案概要を読み解きながら、自分の生活と照らし合わせて意見を投げられる機会を創り、パブリックコメントとして提出した。また、「どろっぶみらいカフェ」メンバー(ひろば環境等を考えるボランティアグループ)と定期的に打ち合わせの場を持ち、来館に繋がっていない家庭に向けて利用者視点でのわかりやすい拠点の概要版を作成したり、最寄駅から来館までのルートの動画作成をしたことで初来館や利用家庭のアクセスのしやすさに繋がった。 ○区社会福祉協議会と人材育成についての打合せの場を設け、担い手育成の現状共有を図った。 ○ぎゅっとでは妊娠期からの切れ目のない支援を地域展開していくため、つどいの広場と現状や課題の認識の共有を図った。また一時預かり事業実施施設や保育園と顔の見える関係づくりを継続して行い、テーマに沿って意見交換することでそれぞれの立場・視点から親子との関りについて確認することができた。 ○これまでの活動経過を踏まえて、地域訓練会の活動・支援や「ななつから…」のミーティングに参加し障がい児サークルグループ交流会にむけ検討・実施することができた。
取組の課題	●地域の活動団体(サークル、プレイパーク、公園遊び)への次世代に繋いでいくための利用家庭の巻き込みや働きかけの強化。 ●こうほくnetほいっぷをはじめとした子育て当事者が主体となり、考え、企画、実施していく仕組みづくりと後方支援。 ●分野ごとに不足してる人材については、関係機関と協働の研修の場を設ける等検討が必要。 ●子育てサークルや子育てサロン等の活動については、団体の意向を聞きながら情報発信の仕組みや工夫が必要。 ○新たな担い手を子育て支援活動につなげられるよう、広報等活用し周知していく必要がある。 ○人材育成について連携できる団体等とのつなぎを行っていくことが必要。

次年度重点目標

令和7年度 重点目標	こども・子育て家庭のウェルビーイングを地域社会全体で支えていく風土づくり
取組内容	●こども家庭庁が提唱している「はじめの100か月の育ちビジョン」において「安心と挑戦の循環」を通してこどものウェルビーイングを高めていけるよう、乳幼児期のこどもの想いや願いを感じ取り、安心して挑戦できる意欲を引き出していくとともに、成功体験を積み重ねていく過程を親や親以外の人とも共有していく。 ●ふれあい遊びや読み聞かせなど、日常的な場面での遊びを通してこどもの気持ちや反応に寄り添いながら応答的な関わりをしていくことで、大人との信頼関係を築き、こども自身が受け入れられ大事にされる経験をすることから自己肯定感を育める環境づくりを意識していく。 ●多様な年齢が主体的、かつダイナミックに遊び込める居場所として外遊びやお散歩などの企画を一時預かり事業（こども誰でも通園制度を含む）や地域の活動団体とも連携し、こどもの持つ発想力や想像力等を引きだしていくとともに、その可能性を体感することからこどもの成長を喜び分かち合う時間を創っていく。 ●自然災害や大雨、酷暑などを含めてで来館しづらい状況の家庭に対しては、日常のひろばと各家庭とをオンラインで繋ぎ、遊びの時間を共有したり蓄積された遊びの様子をSNS等を活用しながら報告することで、自宅でも連続性のある遊びができたり、人との緩やかな繋がりを通した子育てを実感できるような発信をしていく。
令和7年度 重点目標	多様な主体との連携による親になる前の体験の仕組みづくりと環境醸成
取組内容	●乳幼児とのふれあい体験授業を通して、生徒に親になるイメージや子育てへの肯定意識が芽生えるとともに、乳幼児家庭にとっても自分の子育て経験が役に立つ有用感など、その相乗効果を教育機関や支援関係者とも共有し、実施方法等を学校に相談・提案しながら普及啓発に取り組む。 ●学生に向けては、ふれあい体験授業や長期休暇中のボランティア体験後にも継続したボランティア活動や子育てサポートシステムの担い手となる研修（eラーニングを活用）等を通して、子育て家庭の現状理解とともに、ひろばでの預かりを試行するなど、日常の子育てに関われる機会を多く創っていく。 ●6年間実施している4か月児健診受診者対象の調査結果を産前産後支援に関わる専門職、関係機関、支援関係者と共有するとともに、第二子以降向けのプログラムを望む声が多く寄せられ、育児休暇中の父親も増加しているため、第二子以降の家庭や父親等が参加できる事業や取組等を拡げていけるよう強化する。 ●妊娠期家庭に向けては、区内で実施している妊娠期プログラムや両親教室等で「子育てひろば体験チケット」を案内し積極的に参加を促すとともに、商業施設等とも連携し気軽に参加できるイベントを企画することで、多様な資源に頼りながら子育てをしていくことを知ってもらう機会を創っていく。
令和7年度 重点目標	街づくりを意識した地域活動の可視化と地域への繋ぎによる愛着づくり
取組内容	●各地区の自治会町内会で実施している各種行事（祭礼や健民祭など）に職員と子育て家庭と一緒に参加し、開催経緯や運営者の方の想いや配慮、場の雰囲気などを伝えることで、地域行事への関心や参加への動機づけを高め、港北区の豊かな歴史や文化に触れる機会を多く創っていく。 ●地域活動を牽引している自治会町内会の運営者等の協力を仰ぎながら、SNSを活用した地域人材への働きかけを、分野を横断しながら協働で行っていくとともに、個々の意向に合った活動スタイルを提案できるよう、活動内容の一元化と可視化を行っていく。 ●職員が防災・災害対策に関する研修や地域防災訓練等に参加し、地域住民から学んだ知恵や体験を拠点内の避難訓練の際に利用親子に還元するとともに、「港北区防災・区民生活マップ」を活用しながら、自分の居住地域にある防災拠点を確認するなど、防災における共助の意識を高めていく。 ●子育て家庭が地域に繋がれる場として、外遊びやワークショップ等の内容を盛り込んだ企画を設定し、地域活動の魅力や運営に携わる人の想いに触れる機会を創るとともに、企画や開催のプロセスから交わり地域の温かさや応援メッセージを体感してもらうことで、地域活動に緩やかに繋がる入口を創っていく。